

〔収穫コンテナを活用したイチジクの簡易・安定生産技術の開発〕

## イチジク「ドーフィン」の収穫コンテナ栽培における樹体生育および収量、果実品質 ～定植3年目～

村田崇真・荒井那由他・杉田交啓\*

(園芸技術科) \*現農振事

---

【要 約】イチジク「ドーフィン」の収穫コンテナ栽培3年目の樹体生育は、株間100cm区が旺盛である。果実重は列間150cm区で大きいですが、150/100区は着色が悪い。定植3年目までにおいては、収量性が高く果実品質が良好な185/100区および150/150区が有望である。

---

### 【目 的】

東京都における直売果樹品目の拡大を目的に、導入しやすく有利販売が見込める品目としてイチジクの収穫コンテナを用いた簡易・安定生産技術の開発を行う。今年度は、購入苗定植3年目の樹体生育および収量、果実品質を把握し、栽植密度による影響を明らかにする。

### 【方 法】

1. 定植：購入した素掘り苗「ドーフィン」を、2023年3月に用土50Lを充填した収穫コンテナ（容量66L、以下コンテナ）に定植し、無加温ビニールハウスで栽培した。
2. 栽植密度と栽培管理：コンテナを列間185cm/150cmと株間150cm/100cmで組み合わせ、計4区設けた。栽培管理は「果樹の根圏制御栽培法導入マニュアル（栃木県農試）」に準じた。灌水は、生育ステージに合わせて実施した（生育盛期6L/樹・日）。冬期に根切りのため、コンテナ用土に穴（径30mm、深さ15cm、4ヶ所/樹）をあけ、堆肥を詰めた。
3. 調査：樹体生育について、2025年10月8日に結果枝数、枝長を調査した。収穫はコンテナごとに果実の硬さと色を基準に行い、果実品質は試験区ごとにまとめて調査した。

### 【成果の概要】

1. 樹体生育：結果枝長は株間100cm区で長くなった（図1）。株間150cm区では結果枝長が100cm未満の枝数が多かった。結果枝数が少ないほど樹勢は強くなるが、誘引や摘心に多くの労力を要した（データ略）。
2. 収量：収穫開始日は全区で7月下旬だった（表1）。収量は185/150区および150/100区では健全果で130kg/100㎡前後、185/100区および150/150区では200kg/100㎡前後だった（図2）。健全果率は150/150区で最も高くなり、150/100区で最も低くなった。コンテナを密植に配置すると、葉などが果実に接触し、障害果の発生につながると考えられた。定植3年目までの累計収量（健全果）は185/100区が最も多く、次いで150/150区であった（図3）。
3. 果実品質：果実重は列間150cm区が大きくなった一方で、150/100区では着色は低くなった（表1）。コンテナを密植に配置したことにより、隣接する樹の葉が遮光になり、果実に光が当たらず、着色が悪くなったと考えられた。糖度に差はみられなかった。
4. まとめ：185/100区および150/150区が樹体生育は中勢で、収量性がよく、着色が良好なことから、コンテナ栽培の栽植密度として有望であると考えられた。

### 【残された課題・成果の活用・留意点】

1. 引き続き、定植4年目の調査を行う。

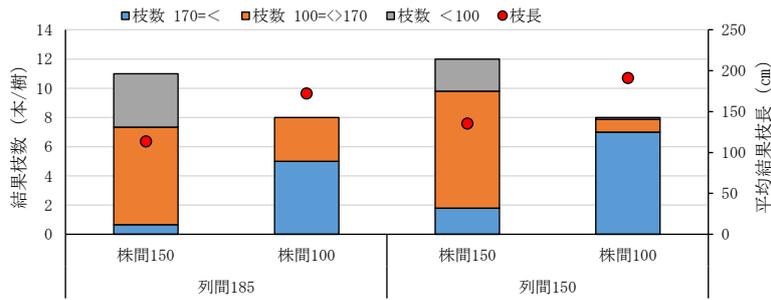


図1 収穫コンテナ栽培における結果枝数と平均結果枝長（定植3年目）

注1) エラーバーは標準誤差。

注2) 結果枝の誘引角度が列間185cm区は19度、150cm区は12度になるように棚を設置した。樹形は一字短梢仕立てとした。コンテナあたりの結果枝本数は、株間150cm区で12本、100cm区で8本になるように芽かきで管理した。

表1 収穫コンテナ栽培における収量および果実品質（定植3年目）

試験区 (列間/株間)	栽植 密度 (/100㎡)	収穫 開始日 (月日)	収量		果実品質 <sup>a</sup>			
			果数 (個/100㎡)	果実重 (g)	糖度 <sup>b</sup> (Brix%)	着色 <sup>c</sup> (%)	果径指数 (縦/横)	硬度 (kg/㎡)
185/150	36	7/25	2,856 b	58.8 b	17.5 ns	91.7 a	1.21 b	0.29 ns
185/100	54	7/22	4,990 a	60.8 b	16.8	87.5 a	1.27 ab	0.33
150/150	44	7/28	3,863 b	64.5 ab	16.1	89.3 a	1.24 b	0.28
150/100	66	7/25	3,762 b	71.2 a	15.4	72.8 b	1.36 a	0.31
分散分析 <sup>d</sup>	列間 (A)	—	NS	**	NS	**	*	NS
	株間 (B)	—	**	NS	NS	**	**	*
	A×B	—	**	NS	NS	*	NS	NS

表中の品種ごと各項目において、異なる英小文字間にはTukey-Kramer法により5%水準で有意差あり。

a) 収穫盛期（8月）の健全果率。 b) 調査日ごとにまとめて測定。 c) 果実の着色部の割合。

d) 二元配置分散分析により\*\*は1%水準で、\*は5%水準で有意差あり。NSは有意差なし。慣行区除く。

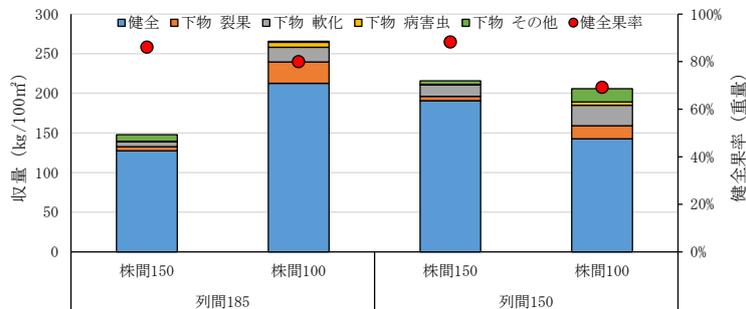


図2 収穫コンテナ栽培における収量および健全果率（定植3年目）

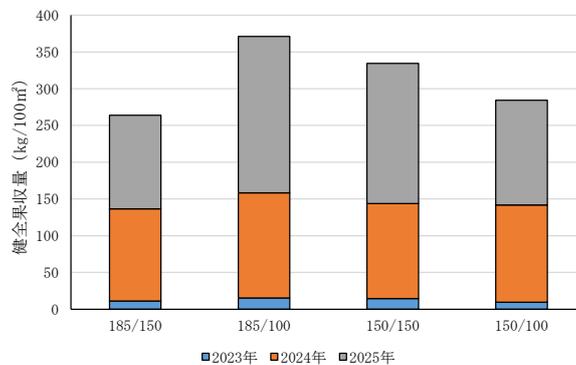


図3 定植3年目までの累計収量（健全果）